

## 立山武雄大佐と ご息女立山恭子様のご紹介

伊佐 二久 陸士55

今の若い方々は、昭和20年（1945）、国外で終戦を迎えられた日本軍将兵のご苦勞をご存じないと思い、この文を紹介することにした。

以前、「偕行」誌で紹介したことがあるが、その頃は元軍人が読者で、今は自衛隊OBの方が主体であるので、皆さんに知ってもらいたいと思い再度発表することにした。

自衛隊には陸軍士官学校の方のご子息やお孫さんがおられると思うので、昔のことを理解していただき、将来に役立てていただければ嬉しく思います。

昭和20年当時航空士官学校に在学していた59期、60期生（年齢は19、18歳の少年である）の一部は、同校第2生徒隊長立山武雄大佐（陸士31期）引率

のもと、操縦訓練のため満洲に派遣された。

以下のことは、立山大佐と行動を共にされた野口信夫氏（陸士54期、当時第17中隊第3区隊長）の「望めば遙か標渺の」から一部引用させていただいたことを報告し、感謝申し上げます。

立山隊長は航空軍司令官から「生徒隊で特攻隊を編成」との指示を受けている。しかし8月15日立山隊長は終戦の玉音放送を聞いて、「生徒隊は速やかに修武台に帰り徳川校長の指揮下に入るべき」と航空軍司令官及び関東軍司令官に意見具申されたが聞き入れられなかった。止むなく下山中佐を航空士官学校に派遣し、徳川校長に意見具申、「生徒隊各中隊は速やかに修武台に集結すべし」との命令を17日夜受けている。この命令で生徒たちは鉄道で帰校することができた。

もしも満洲に留まっていたら、武器もないのにソビエト軍と戦い、戦死かシベリア抑留になっていただろう。まさに命の恩人と言うべきである。

それ以前、昭和20年3月、立山隊長は新京の関東軍司令部に行き、「ソビエト軍の侵攻が予想されるから、生徒の操縦訓練は満鉄沿線の飛行場にしてもらいたい」と意見具申したが、入れられなかった。

もしも鉄道沿線で訓練していたら、終戦後でも列車で帰国できたろうにと

残念である。

立山隊長のおかげで命拾いした生徒たちは、それぞれ各方面で戦後も活躍し、日本の復興に寄与している。

日本が敗戦にもかかわらず、経済大国に発展した一因も、立山隊長のおかげと思っている。

59期、60期生徒のご家族、奥様、お子様、お孫様方、このことをご存じない方が多いと思うが、立山隊長のおかげで今の幸せがあることを思い、感謝を捧げていただきたいと思っている。

次は立山隊長のご息女、立山恭子様のことをお知らせする。

私は八代総合病院を退職後、エジプトのカイロ大学小児病院プロジェクトのチームリーダーを3年間勤めたが、私の前任でチームリーダーを勤めておられた方が、立山恭子様であった。立山様はとても優秀な方で、小児病院の院長、副院長からも非常に信頼されており、おかげで私も助かったものがある。

この病院は小児病院のないカイロ大校のため、日本の無償援助で1983年に建てられたが、立山様は国際協力事業団（現「国際協力機構」）の専門家として他の看護、電気専門家たちと共に1983年から88年の5年間勤められ、おかげで小児医療、看護面で改善、エジプトの小児死亡率が非常に低下し感謝されていた。

私も立山様からいろいろ教えていただき、おかげで順調に勤めることができた。

ここで立山様のご経歴を紹介させていただきます。

立山様は聖路加看護大学専攻科を1963年卒業、2年後3人のシスターと東パキスタンの聖アン病院で3年間看護師、助産婦の養成と病院運営を指導された。

東パキスタンがバンングラデシュとして独立した混乱期（1972年、昭和47年）にも同病院で協力されている。

2002年から04年（平成14～16年）の間、カンボジア事務所代表として出張、活躍されている。カイロ大学小児病院に関しては上述した如くである。

立山様は日本キリスト教海外医療協力会に属され、パキスタン、エジプト、インド、カンボジアなど多くの発展途上国の医療協力で活躍しておられるが、その他各地の国際地域看護研究会、国際保健医療学会など多くの学会で講演しておられる。

以上、立山武雄生徒隊長とご息女立山恭子様のご活躍を紹介させていただきました。ご参考になれば嬉しく思います。編集委・立山生徒隊長のご子息、立山尚武氏は陸士60期で兵科は航空、東京都東大和市にてご健在と伺っております。